



水と光

先月はリバプールにて、変わったインスタレーション・ライトショーに、照明デザイナーとして関わらせていただきました。会場となった、リバプール南に位置するトックステス水貯蔵庫は、急増する人口の衛生と健康を改善するために1845年に建てられ、1997年まで水貯蔵庫として使われていました。閉鎖された後、その巨大なスペースは、地域のコミュニティのための事業に使われたりしていましたが、本格的にイベント会場としてオープンするために、今回リバプール市がアーティストグループ“Invisible Flock”とコラボレーションして、今回の水をテーマにした大規模のインスタレーション『Aurora』を企画しました。

私が“Invisible Flock”と最後に一緒にお仕事をさせていただいたのは2011年なので、かれこれ7年ぶりのコラボレーションでした。2011年以来、劇場でのクリエイションから距離を置き始めた彼らは、その後、地域とアートを繋ぐイベントや海外でのインスタレーション・活動に力を入れるようになったそうです。今回のインスタレーションもその一環でしたが、照明でストーリー・シーンを作り、水のジャーニーを表現したいということで、お話をもちかけてきてくださいました。

役者はいなく、主役は水。国の気候、文化や宗教によって、水への価値観や思い出は人それぞれ違うと思います。身近にありすぎて、貴重な存在ということのを忘れてしまっている現代の私達に、今一度、水の姿を五感を使って感じてもらうというインスタレーションです。水→蒸発→モンスーン(雨)→氷河→オーロラという、自然の中で水が姿を変えていく様を、実際に水、ミストマシン、雨マシン、ドライアイス、大量の水を使い、照明と音響で劇的に演出して、

水のジャーニーを表現しました。

使った照明機材は、Clay Paky Mythos、Alpha Profile 700、SGM GLP G-Profile、ETC Source Four Lustr v2、Chauvet Ovation、Colorado 2、Colorbeam POL-111。予想どおり、室内は湿気がすごかったので、IP65対応のG-ProfileやColorado 2、特に雨の下に置く照明などはPOLシリーズを使いました。45個×30cmの水にLEDパネルの照明を仕込み(毎日新しい氷を仕込む)、それぞれをDMXコントロールのモーターチェーンに吊り、3Dアニメーションソフト(英国+インドネシアチーム担当)でモーターの動きと照明を制御したり、レーザーを四方向から中央の1mほどの巨大な氷に打ち、オーロラを作り出すという、とても手のかかる凝ったことをしていました。水の照明のカラーパレットや光の動き、光量は私が指示して英国チームがプログラミングをし、上にあげたその他の照明機材は自分がデザインとプログラミングを担当しました。役者がいないため、サウンドと大胆に冒險することができ、とても想像力が掻き立てられるプロジェクトでした。

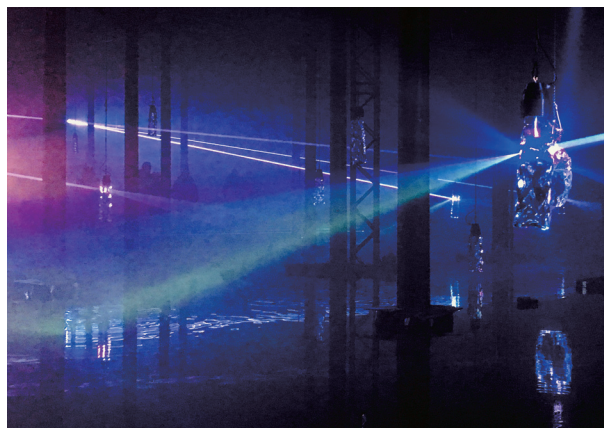
このプロジェクトで、何よりも大変だったのは、実験期間中に水貯蔵庫に水を張ったところ、古いレンガ壁の隙間から道端に水が大量に漏れ出し、このままでは市からの実行許可が下りないということで、広大な貯蔵庫内全体を水養生(巨大プール製作)をせざるをえなくなり、そこに多大な予算をもって行かれました。その穴埋めのため、照明、音響、雨マシン等の機材半分がカットされたうえに、予算節約のため、水自体の搬入が大幅に遅らされ、水、雨を見れないままシュートとプログラミングをするはめに。当て

たくても当てるものがないというのは、照明デザイナーとしてはとても苦しい状況です。ありません。「ほんの一部分でもいいから、水や雨が見えるように、なにか対策をとってください。そうでもしないと、照明の出来上がりの責任が取れません」と伝えるも、与えられたのは子どものプールとペットボトルに水を入れ、はしごの上から誰かが一瞬雨を降らすということだけで、シーンの長さや移り変わりをプログラムするのに、かなり苦戦しました。怒りは頂点まで達していましたが、苦しいのはみんな一緒と思うと、なんとか苛立ちを抑えるしかありませんでした。

苦の裏には、やりがいを感じることもたくさんありました。このプロジェクトでコラボレーションした作家とエンジニアは、英国の“Invisible Flock”4人のほかに、インドのサウンド作家2人、インドネシアのサウンドエンジニア、インスタレーション照明作家、照明ソフト&ハードエンジニアの5人と、日本の舞台照明デザイナーである私をいれて総勢12人。文化も価値観も発想も全く違うクリエイターたちが集まったこの国際チームだったからこそ、実現した作品になったと思います。インドのお寺と聖なる水(ガンジス川)、インドネシアのモンスーンを呼ぶ儀式と音楽、日本の温泉や滝、そして津波、ロンドンで収録した街中の賑わい音と騒音、その音が物語る人口増加、温暖化、そしてその影響で溶けていく北南極の水、その危機感と対照的に浮き上がる神秘的なオーロラ。水の美しさと儚さを表現し、私たちそれぞれの水への思い、恐怖、喜びをチームワークで一つの形にしていけるプロセスは、とても貴重でした。



クリエイティブチーム



公演風景